北越奇談

二

一〇三

北越奇談巻之二

北越 崑崙橋茂世述
東都 柳亭種彦校合

七奇辨

後越に古より七不思議といふことあり今尚諸方の旅客好事の人皆四に弘く其奇を探んとこころざす其説後々とくく文に実事をもつて近世諸家の記行に載る所各々名目に別異あり〳〵論説をなす所も又ゆゑ〳〵ぞ是必風俗の客民間或は訳者に就く問訊をなすより誤り来りしとぞ可惜民間愚蒙の業却て生

四の旨を失くしてべし凡諸家の雑記記行にあぐる所と又人家に論説をなす所を合せるに今尚二十有四奇あり

神楽嶽の神乗　海鳴　胴鳴　燃土　七ツ法師　八ツ滝
白兎　鎌鼬　火井　塩井　燃水　蓑虫の火
冬雷　逆竹　風穴　沸壺　白螺　土用清水
四蓋波　箭根石　三度栗　無縫塔　沖の題目
八房梅　即身仏　是なり予密に按ずるに日本書紀の二説と本朝〳〵亨徳の比予が四好事の者偶此七奇を撰せ〳〵べし尤其時世は義政将軍の比に〳〵風流好奇今時の泰平に等けまぶさもありなんと何是永く此四の勝奇

となり諸家の記録にも載せ　公聴にも入られべ今更止べきにあらずやハ此説今古の別あり〻く古いまゞ諸国の奇なる名勝案覽の多〻ざる所と好事の者も又少きゞ〻ちに目前の説の〻に〻く他邦の論に〻ら〻ゞ今ハ太平永く續き土ハ君恩よりとり民ハ耕作よ富ゞ常に間暇きに乘し四方に柱歴し勝を探り家にあ〻くハ山林を手げ石を穿水脈を通じ田野を開き深山幽谷海島河源にあるまでハ力の及ぶ所ゞ〻〻故に天の化も又盛に〻く五日十日乃風るゝく時を不遠草木生じ百穀実り熟国ハ却て涼〻く寒国ハ又暖なり故此諸州の産物奇勝甚類もるあ者多〻

見をもゝく見をこれべ古の七奇ハ今尚他邦に同じきあるを世予が国民間の事蒙他の問訊に對〻く見非かの七奇をかざ〻んと欲るゆく見を減じ彼を増して終に其実べきの志〻きなり予愚に拙く古の七奇を辨じ今の七奇を撰せんことを希くハ四方の好事家巻之説論せよ

古の七奇

燃土　燃水　白鬼　海鳴　胴鳴　火井

無縫塔

其一　燃土　焚土なり茅山の陽西北の渓深町のわとり移の池朝日の池同柿崎の裏田の沼とり生る又三島郡行森とる

呼用水の溜池及田の沼より出づ之外呼くに屋敷の桑田
江海の変上古艸根木葉沈く落かさなりて数千年をつ
泥土のごとくなりて拾て田家の人切あげて日に干焚
きて即ち燃る今尚信州にも出西国にもありと云て然
きども日本書紀に　人皇三十九代天智帝七年戊辰五
月越国進水土可代薪油者とあり上古已に予が国より
代一奇を出せと明なり今年文化庚午まで千百四十
三年にあたり
其二　燃水草生津の油即臭水の油なり　頸城郡九六ヶ呼然
れどもその大なるあり蒲原郡草生津村に新津村に柄国

本村に黒川飯村ホなり出き湯の上蛇崎と云呼海中に生ず
代呼く水中より油まで沸出る或は石に付て
然れどもいろなる油なるに或ちどに水の臭きゆへに水の
油と称ず張華ず博物志石泉脂石漆　李時珍ず本艸に石
脳油又石油　山油　酉陽雑記に石脂水とある皆代類う
今代邦の醫是を石脳油に出用るに大ず効あり云て予
是を按ずるに是も又焚土のごく拔十年前松柏の古木
大材土中に落入る松脂の腐水と拔ず也其故は玄油煙多く
松の匂ひあり　或人云松脂は茯苓となり琥珀となる何ぞ油となるの理あらん
是は只土中の油なるべしと云ふ松脂を樹より自然に出ずり
落土中に凝堅るもの化して茯苓琥珀ともなるべしと云ふ土中に埋るる松脂
ひく水土のそこより腐爛せるものこれあり只土中自然のあぶらにいたる

暗愚の説

殊に上古北越へいたる山谷水土の変ありしかを呼て
水底沼田の下多く坩土の大なるものを出ることあり
近江高浜湖水の底樋ありぬきの呼数丈の土中より立木の
まくなる坩土数十を出ることあり是其奇可察ふ二考即
可代薪油のなり

其三　白兎ハ諸州共に見ありとゝいへども他邦の白兎ハ即て
質に白く生まれより白く冬夏ともに白ふ毛色なれ共その
常なりと越国に産する呼ハ夏の末より秋の終りまでくハ
く灰毛にて白ハ稀なり冬ハ即ち白に雪の凝まるがごと
夏秋も尚まだらなるものゝふるゝ去る安永年中古志郡の

うちより黒頭の白兎を出せりとあり近世に多く真羽
又信州加賀越中佐州などにも白兎予が国のごとしとあり
然れども年代実記に寶亀五甲寅従越国獻白兎と
あり此国他邦に先ぶちて奇しく称せるゝ歟凡此二考今
なる式諸州に類生ることゝいへども證書明なる式以他邦の
産ハおく越国の余流といへべし

其四　海鳴ハ時天といへども多なりんとすることあり
潮の音五六里に聞へ南にあり風雨の日は時ん
とすることあり北は世世見をもつて四人陰時天行今九州羅
見と類する呼ありといへり然れども予が国此等先達て

に成り今好事の者九州離の中に出せりと是を予是を按ずるに数十里の海辺大山の麓に必ず汐の是を出さざる流れなるべしと雖ども法華経に其気自然と南北なると北越の海に流るゝ事に以奇となる事享徳年間の旧記に此奇をのべる成る

其五　胴体の秋晴の日風なるべしと雖ども必是を聞たゝんべき中より雷の裏き落るごく雪の高山なれ落るごきあり

頸城郡には黒姫嶽と云蒲原古志の郡には薙門山陸奥嶽ともいふ又岩船郡には村上外道山ともいふ其等次に遠近なる俗の談にむ已奥州阿部の族徒黒色なる兵衛と云る者あり八幡太郎義家のために討ち其頭と胴と西に飛んで切むと今蒲原郡渡沒の辺黒色なる村八幡の社あり其下時々震動して成る

然るに其胴を頭と合せんと成欲しく此奇動をなせりと云伝へ一笑とすべし今此奇稀に出せり只一黒色の村二三里の間に今なを此動あるのみ其方角まるがへべくも在ぞ黒色八幡の社地なりと云り又黒色なる村の人は前くより是に此奇動を出すと云て他に出ることなし即出是又一奇なり予近比西寅の秋来山より西北の海辺に出て山の麓に海潮の響地に接して此動を成すと云べし是を以按ずるに頸城郡の海は能登の北涯をくづれ佐州の南浦と云れ

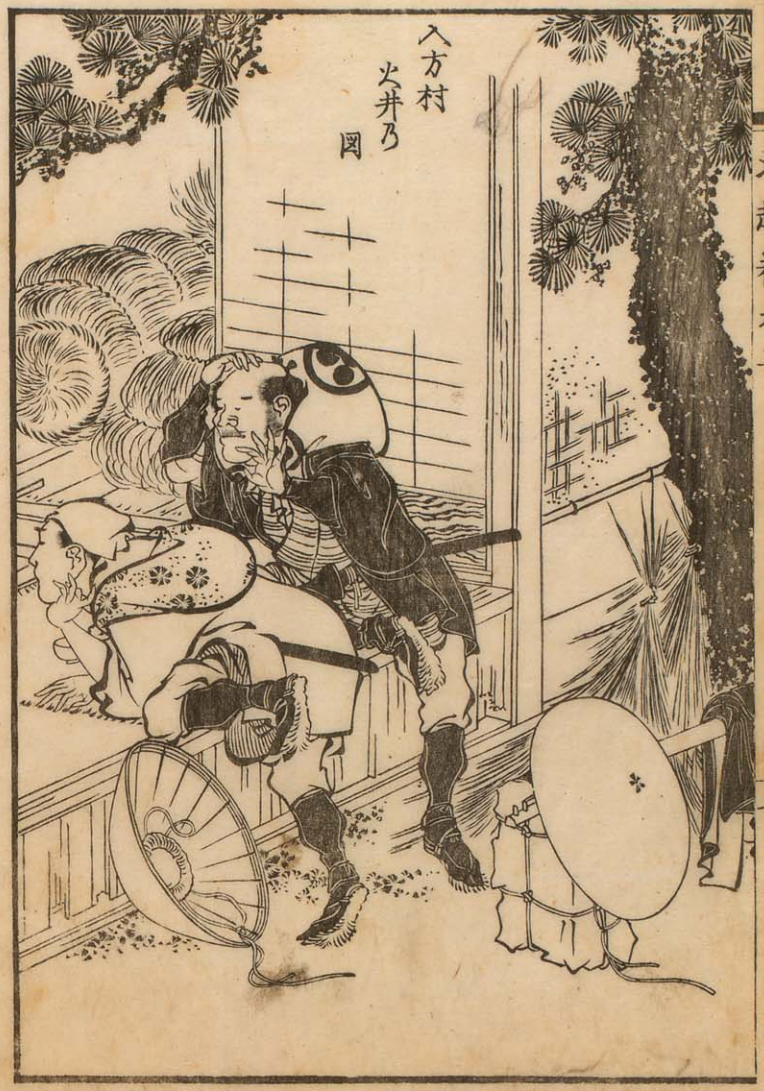
く大洋数千里の海潮茲に的る所なれば弘誓を発して
あづま見即数千里の外風雨気ざしたるごとく其気海上
を走りて地に徹接する所即其気地を押し山谷に徹して
鳴動し風気をもつて製するに仏化にして方に風
うるんとするごとく窓戸先づ鳴り雨ふるんとする時に煙
自然に落ちかゝり気鬱し魚なり猫児ひとり狗児自
然にしてそ気先づ押るものありされば晴天波風ちがう
るわれ古浦に胴鳴るごとく必風雨あり胴鳴とは胴
に筋くゝる以に名付しうん仏業をもつて擦もれむ紙
後にのゝ焼るいれなゝ他邦いまゞ穿鑿のもつざる所只

地勢にしるる黒色の一奇

其六　無縫塔八浦系弘河内谷陽谷寺門外溪流数十段の
渕甲りて百尺ばかりの間岸平らに乱石磊落より仏寺住僧
入寂三年の前必仏渕より墓所の下とかゝる石一方岸の上に
めづるごとく千石巷の石に異なるにすめねと貝殻
〻来徒の人拾いとりて見ても無縫塔なりと衆同ろ
さも所皆一なり其奇怪いとなるごとも異がたし一下しび
衆人の名付るより千石幾度渕に抛入れども一夜にしてまた
りもの所よめげるごとくなり先年住職の和尚其石渕に投
入れて曰我大願のいまゞ死をべるべきごとく其場より寺を生

て再びゆゝさりに命つゞなく長寿なりしといり其奇医
予が所にいりて寺の墳墓を見るに已に其石十四五並べり
命の常の無徒塔人作なり信州四部の温泉寺が奇とおい
ドとゝ作へ予いまゞ其地にゆゝを知る人にくゝく
に水底より無縫塔の形を作りてくゝめぐるといり
いづれ追て考へべし只〻が一奇へ怪といへべきのゝ

其七　火井三条の南一里ばかり山の麓入方村即入方寺村なり又妙法寺又如法寺
ともゝ　某ゝゝ百姓の家炉の角に石臼をゝき其穴に竹を
さゝ火をかゞせば即声あり〻く火うり盛に燃ること尺ばかり
なゝん縦横に竹をゝくゝめぐらゝ竹の孔ゝゝ皆火ありる竹を


入方村
火井乃
図

少〻しめぐれば央へ火絶てくなく上にぐり火さんなり皆土中
より登れる気のもゆるなるべし一説に硫黄の気と云へど正
無硫黄ハ即火遠く土中に入て地中も又燃なり是ハ必臭水油
の気なるべし凡四中是又類もる所志ざ寻〻柄目木村即入方
村に用ゐ寺泊大和田山の間少〻の水湧りあり〻く冷水なれども
常又湯の沸くごとく泡立くあり是に火をかざせば忽燃る
そのあり杤尾の郷比礼と云所山沢の水に火式をかざせば水上に火
燃る魚沼郡一ノ官村山間の洞流に火をともせば三尺ばかり立
ていく火もゆる古志郡見附川舟渡ある所川原の砂に笹状
さ〻火をかざせば幾所も燃〻て不絶玄夜行に使あり其余所〻

に多く頭城郡上野尾の糸谷間より風の生る洞あり火を焚
もえきれば忽空中に火燃ること半輪又門郡吉村大滝氏近来
井を掘るに烟草の空がらより火うつり井中すべて燃上りて数日
きえぬ奇なり水戸赤水先生此一奇説しるし来る
即琅耶代醉に火井の説をあげ又大明一統志にも蜀地雲
南に有火井不過二三所とあり只赤水の奥羽記行に即
身仏逆行八房梅ホと七奇にあげ越人見ホの白癜を奇
とせるも可笑とそしりあざけるなり赤水偶此四
ツ農夫商客ホの蒙説を聚北越に入るごとくなるべし
何ぞ再び知者をまちてやくるねばならざるや赤水乃情識

にて浅しといへり又此火井を賞して見陰火にあらず
陽火にあらずといひ見又誤まり硫黄の火を以見にうつせ
ば即燃る見陽火にあらずして何ぞや陰火は陽火にあらざ
忽消るものなり

右は古の七奇なり

俗説十有七奇

其一　神楽嶽のかぐらといふる山下へ雪まなく時をて
山上忽御神楽を奏する音聞ゆ其所多
なるべし中越後にて見ぬ生ず羽州の境村上山中と又
下越後にて見る所なれば今佛ざるひは川の色とまいり予教

年其地とゝもれども未詳なるまゝきとにしるすのみ
て穿鑿を歴く其実を記もべし或人見を少うるゞ
牧笛樵歌なんどのやまりけんいづゝ

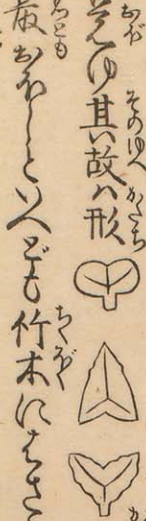
其二　箭ノ根石鏃　諸方の好事家已に此奇を知
形状ありく上品なるあり紫白黄黑皆玉をゞもるどに
して込なるあり八すゞりなるあり二す三す四すあ
るあり又稀なり多くは一すゞりあり總く北球所く山中並
ある古き社地古塚跡畑などにあり雷斧石をまゝ
又俗に天狗のメシガイといふ物を出を石鏃に似く形異之頸城
郡に大光寺村山畑神田山三箇郡に多沢地の北京ヶ入村

渡辺村出者ヶ岡竹森の村古き社地あり雪中に土のうちより
表放て竹木に鑿之とあり浦糸郡より伊夜日子山下禁村の
畑黑滝の古城跡糸ゆり又糸山の西北土底村海辺沙山の間に小
地あり此所玉髓一日く小児ホを辺おく拾ひつゝて
社之郡又元のゞ予一ゝ七此地にわたび其奇を試んとおひ
一ヶ小児ホを伴ひかの地より五六丁に〳〵此のわりにいり
石鏃五ヶ六ヶ拾ひ得ゆりねねを社赤原に又独行してその
所にもり見るにたゞして三ヶ四ヶあり其中不易天ゆるに半鏃
の形をゆ〳〵いまゞ全くなるあり又小底所くよ石
鏃一ヶもゞにゞ〳〵を皆一片くに割ヶ花ゆるゞとまたに

予此奇を見て身毛竦然なせり又社地のほとに地中
より花放て人にあれるもあれど敢て損傷にあらざれど又信州
境関山の中にて農家の婦戸外に生て浴湯したりけるに山中
より忽ちもなく矢箭て盥の中に花入り女おどろき立
上て見れば大なる箭の根石ありて七寸斗なるあなり
誠に其奇なるべしと徳て北斌山下の田家に八二月十吾
十八日山祇祭とて山に不入り誤て山に入ることあり必神祟の
怪をなす病とらん今八所に拾ひつるとて尚ほね赤るを
に不絶といへり邑續日本紀日本後紀美和六年出羽四より八月
八月廿九日田河郡の西淡斧を達る舟五十余里の間元より

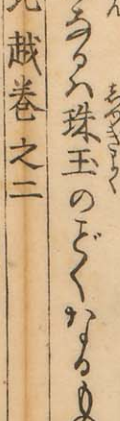
石なり去る十三日より雷雨おびたしく十余日式歴時天を見る
後落る石少かりしを鏃に似たる石或白或赤とあり又三
代実録に仁和元年六月廿一日出羽四秋田城及飽海郡神宮
の西淡に石鏃降ること月二年出羽四飽海郡諸神社乃辺
に石鏃降ることあり上古已に其神奇を記て今世
好事の者見人作に石と石と式打合せ割花るを式
形をなすといへ近頃今津の医某なるあ来て作り
こと予に示て其形似よりて見るにもあらざる矣人きのみ
紫土色俗に火打石といへるあるを予即其まなる紫白黒
色各々陰丸なるあ五六乃式出て見せたるに医ナドめく

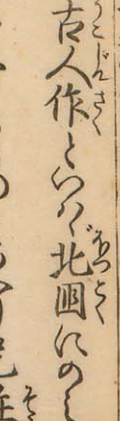
信服ぜり又江州石高なるあり其人作るを武論ぜしと又或人
上古見を作るに竹木の先に挿し弓獣を獵をし見又論ぜる
に見るべきの説なり　石鏃上品なるあり竹木を削こづら
鑿をとりぐ竹木に挿し弓にてげく用ひるおにあるぞ
と見るの其故は形

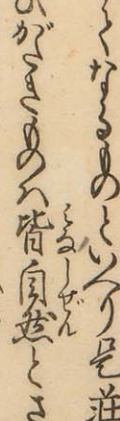


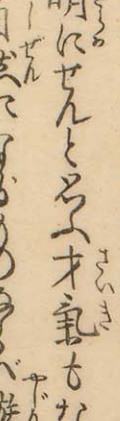
あり尋くあり

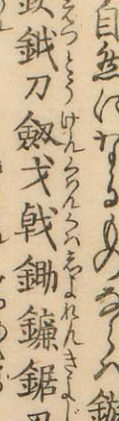
不用の載に力を劣せん
やは上形なるあり珠玉のごくなるあり鐵槌にも碎き

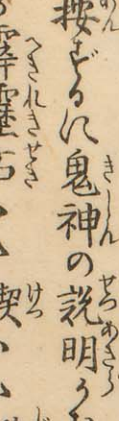


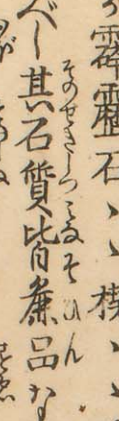


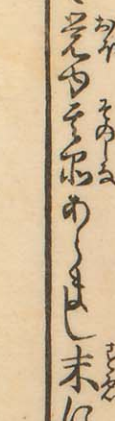


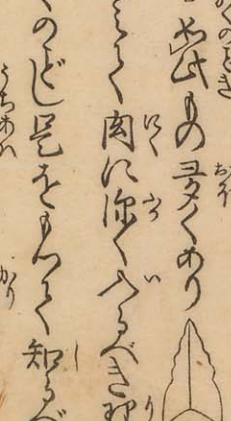


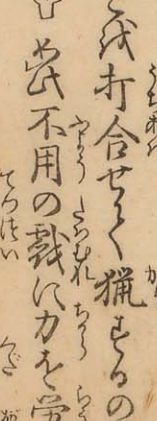


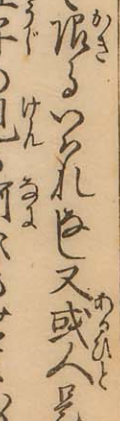


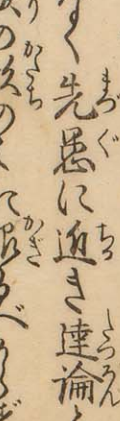


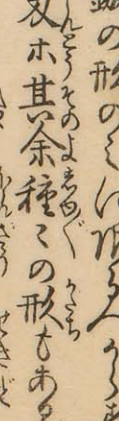


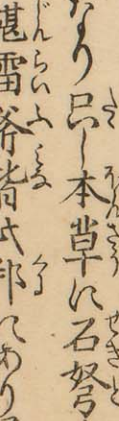


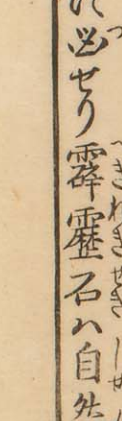












真の鏃は　かくのごとくを見るべし
又古人銅鐵いまだ石と石を打合せて獵をるのこと
に代をなさべ何ぞ

あり又上古人作るに北国にのこる所るつれ也又或人見る
自然にしてなるものと云て見荘子の見る何にもせよ
智に及びがたきものは皆自然と云べきもむやるものなるぞ
物理を明にせんとて才氣もなく先愚に近き連論と云
べし見も自然になるものなるべ鏃の形のごに形なるべ或
は鉾鎗鉄鉞刀劔戈戟鋤鎌鋸及ホ其余種々の形もあるべし
予見を按ずるに鬼神の説明なり只一本草に石砮と云
は武めの霹靂石丶楔丶礎雷斧皆武邦にあり見い
人作なるべし其石質皆兼品なれば石石琢磨しく形を
なせりと見るべ石末に必ずり霹靂石は自然

其形も定りなく大小数百種色玉のごとく石弩八群石の内より
自然に先〳〵と〳〵割れぬもれば武邦石鏃の類に成り
ごとべ雲母石石英の類又荊州梁州肅慎国石を以て
矢に作るとあり是ら予数年此奇を試るに其実多く生る所
往来の石質柔正なる所に石鏃も又柔正なり石質明徹
なる所に石質も又珠玉のごと其石色も又ほぐ其中柔悪
の所ばかりなるものゝ所なる人に作るとなるべし又ある人
英石と云ふに是なりと云ふ予其説を伸んとして諸〳〵曰
一儒者湾に入り石鏃をもつて来柏清人に示す清客是
て英石なりと〳〵大笑せりと云ふ予ごいぶうき説を伝へ

猥に武倫をなせりとおぼゆ笑べきのまぐれなりかの呉人
英石を包く玉となせる人豈笑ものなんや　一説に英石八即
玉に似る石なり武邦陸奥玉に俱るのあり知ねべし本艸霹靂石
注に石に称するものなるべし
八武邦の落星石俗に星銷と云るあり是なり今北越信州
佐州に余所に山中にあり空中太陽の気欝結して忽火
光を發して死去るあり地上に落るとも即化して石となること
是なり其火光大なる八俗に光りあり　尤傳星落ること多雨
小なる八流星又疾這星と云
即武火光なり豈真の星なんや　霹靂石形不一其色
黑色深黑白点ホなり或ぐ光彩洞徹明徹も玉俗に落星石
銷石と云

霹靂堪 四品
俗に石劔
雷の太鼓の撥と云

長一尺六寸余

八寸

一尺五分

霹靂桙 三品
俗に大勾玉
鬼の金棒と云

長一尺三寸余
巾り五寸五分

長八寸五分 両面
此所ものぎの下自然と角く板の形のごと

○

雷斧石三品
俗に抱まさり
此ほかにも〻出
こまかな灰色

径四寸余
厚八分

○此二品上に出ぐく

青黑色
長九寸四分 厚四分余

天狗ノ飯櫂一品
赤黑石

此数品手ごろ厚さ
三寸余又異形も
あるべし

石鏃十三品

○大小異形　俗に箭の根又矢石と云

紫赤青黑白黄斑色皆ゆ玉　黄玉色ハ多く無形なり

右数品わ〳〵まゝゆ式諸方の風子よく見を知る只〳〵式一奇ハ羽州てもつく祖〳〵とゝ〳〵けまど今世北越式奇多ゞゆ人に他邦より見を求むる者必予が図をもつく名〳〵て

或人の曰汝頻に鬼神を信じ〳〵婦女子のごゝ豈鬼神手足有てものエをなすとゝわ〳〵んや予が曰鬼神又なきにわ〳〵ぞ易に遊魂変をなを是なり鬼神又ゆ足ゆ〳〵鏃をつくり出に〳〵わ〳〵ぞ上古戦場の死氣凝結〳〵て不散一念只鏃を磨て欲ゆ對せんとを其元石式穿ゆ〳〵忽式形をなを前にもつるやゆ気をもつ〳〵制をるゆ〳〵つゆきにゆる〳〵六月雪をゆ〳〵三年る〳〵ざるの類匹夫の恨ぶふゆ式も〳〵く戦死の遺恨をや只其汝式図の奇を手ゆ〳〵予一人を屈をるにわ〳〵ぞ汝も又自生図を辱むるなり於此因ゆに〳〵或人両三度語〳〵く曰我ゆ〳〵羽州男鹿嶋の中蕃武の碑ありと然れば蕃武式図に節死

とるに明らかなり是一快なるべしゝと予笑て曰公は聖人の道を学んで中華を賞ずるは尤もあるなん何ぞ本邦とて強く実録い図と是を快とすなりとせば即公ホも又尤樸不毛の辱しめをいるるべしゝや是好奇の淫さるべし又云図字と云ども章を文ずるに予が不及論さるものとなん西海の蟠龍子俗説辯をあつて其中本邦の奇を式論ずる所に云く〳〵必云公図何〳〵をもつて奇とすと是以ず奇とするに是〳〵んと中華の書を式かの図已にありと記せるとあるに是〳〵彼図を賞しく本邦を辱しめるの文辯なり予密に是〳〵彼図を論ずべ中華の書何〳〵をあげ記されども不珍とと本邦已に式奇あり即是なりと本邦かの図に不減の賞を記〳〵さるなり又蟠龍子自言式俗説辯を誇れる人ありとせけり詰らく其人に面〳〵く高論を少んと是我那人所なりと記せり予近に俗説辯二三編を〳〵〳〵ひ〳〵く其中時頼秀吉両公図図の論あり〳〵ん〳〵ず誤生り蟠龍子式二公の意を不察と云べ〳〵〳〵理に不おの妙に〳〵く言〳〵何ぞ窮る所あ〳〵んや予が石鏃の論

愛の好事家妙論あ〳〵んと式まりのこと

鐔鼬一〻撞太刀時所に定り色〳〵〳〵社地とる若

不恵に面部手足なんど皮肉割裂して白〳〵ぶかること

なりきびにの大小にかゝりあれ〻さて血を不出痛〻もなく
何のけがとも又に名付がきあり或説に鬼神の又に
ゆきあり其解る所に奇をもつて故に様太刀とつて此説
當代りとつべきる凡鬼神へ北方陰令の地にあつまるあに
〻く即坤を鬼門〻とすと依之る北就へ鬼神の奇をぞ侵
給れども天地の化長じ人気満て〻小随て〻自然と幽冥に通
もるあと是ゆに奇北就三五十前年までハをぞ多かりしが
今へ稀にあるすなり伊夜日子より四上山にかけ諭を所玉坂
とつあり此所にあやまつて濆倒〻者必に奇をうく也と
所〻にあり又一説に寒気皮膚の間に凝封せられて咳をなる

〻〻〻皮肉さけ其気度とつて是医家の説なるべし尤も
べ甲信の二国奥白河の辺へ極て地高なる所に〻〻寒気北
就に倍をもつべに奇却て〻〻〻又其治方に古き暦
紙を焼て貼れば即効あり是邪を去るのゆへ只〻揉ひる及
解るに〻あるべ是も鬼神の気にふれなるべし今へ他邦も
此奇稀にあるとつて
其四　四蓋波　四海波　頸城郡名立の下鵜ケ浦とつる所打寄る
波を数て四方より四〻に打とつて是磯石九方に峙て紀
きるゆへに此紋をなせるなるべし〻たとへ五六かいの波をもとも
敢て奇とするに足〻べ俗説高砂の謡ひを再ノ四海波とつる

ハ只目出度めとのゝ給く四海と四蓋の意を志ゝ給ふ

蒙疑をいゝ出せるゝ他邦の人に對ゝ手竊に面赤を

其五　冬雷ハ北海氣候の逆ふゝく南方の國に異なるゝ

是に依ゝて南國の樹ハ正月に開き北國ハ三月に成る果南の

水仙ハ冬中ゝ是を咲ゝ手が國ハ未二月に漸く咲けり是皆

陰陽運速に付かゝざるがゆへなり

其六　三度栗ハ蒲原郡安田村にあり親鸞上人の植る所

と志れ旧跡なり七奇の部にあゝて武稜類常州にもありと

いゝかゝる異木変艸稀にあるものゝ近年村に妻准寄上人

の植ゆる旧跡とのゝ成へし

其七　沖の題目ハ角田須海上にゝく日蓮上人の旧跡なり

波風静なる日波上に題目の文字浮ミ出ると云て沖に祈

の足つるゝ今に成ありと云ゝ信と云て古歌ぬべき

たり也羽州崔が岡に梵字川あり其源湯殿山より出く

流水の紋に梵字見ゆると云ふ是ホのと云ふ民を孝く

とゝりのゝ奇とゝ成る也是ゝ

其八　沸壺　熱壺　蒲原郡田村　即油の引く十丁斗

隔ゝ山の尾上丘の川廻りゝゝる所径四五尺の井あり其中水

自然にさゝく沸ゝるゝと二三尺外に溢ゝく呼ゝ文に増減色

是へ武中之山南郡怖山ホのゝゝ即ち地中硫黄の気あゝ

臭水油の気泉脈を押しく代動揺をなとうべし先土地
宇記に云咄泉の類なり

其九　塩井三島郡与板より西南山の中塩の入坂沢中に出ぐ
又栃尾の東山の百姓中村渓流の中に井あり其村に是を
汲ぐ食用に当予て井水を味ひしに甚ぐ鹹し俗是を
孔法大師の四ぐといり水戸赤水子前の火井を賞しく
曰代奇ひとり浮屠子の眼に解きぐることを幸ひなれとかくる
俗説を作る好詭と称もべ　又享保十三戊申二月に魚沼郡
新保村庄屋半左衛門庭隅の石の下より白塩代吹出して日く
に数升なりしが一ヶ月ばかりにく自然に減ぐ出ぬ是ホも

地塩の凝結せるめる代酔偏に木塩ホの説をあぐ他邦にも
塩井の奇ハ多くといり然れども其中石塩ハ最奇なり

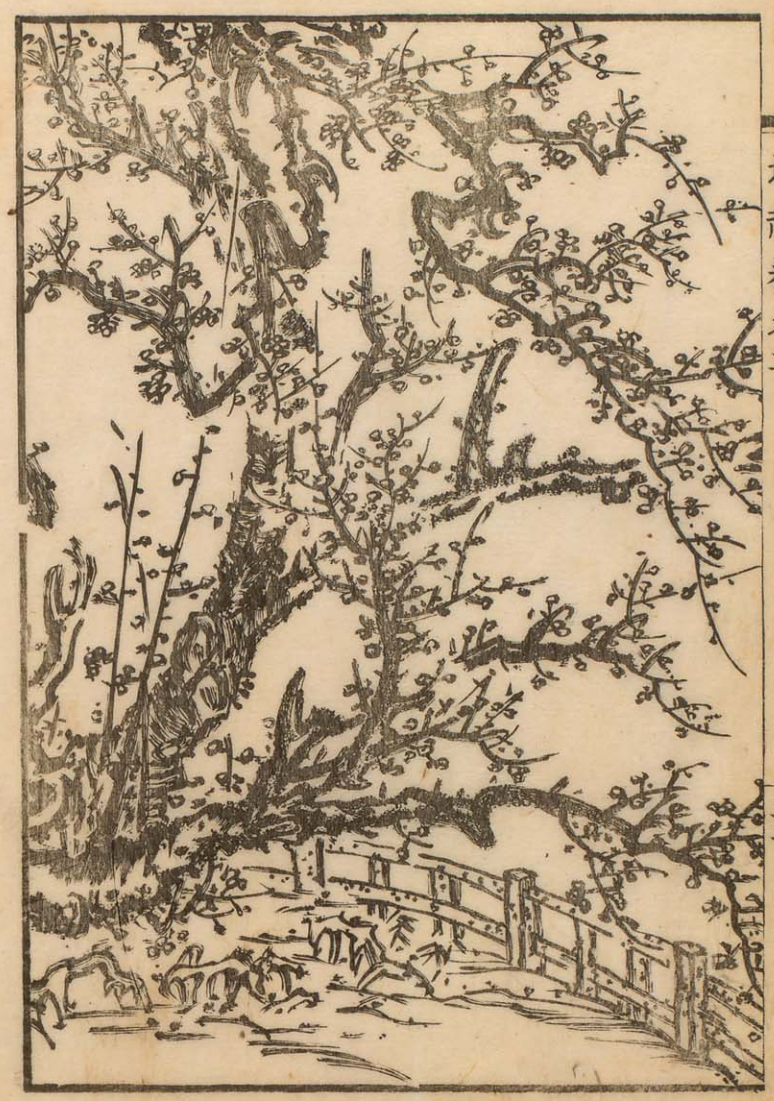
其十　逆竹新潟の上る百姓村にあり是亀上人の四説にて
今ハ代竹皇幽遠ようむくハ逆生の竹もありしといり今ハ
絶くゐくと七奇にハあらぐ

其十一　即身仏三島郡野積浜最上寺孔智法印の肉骨く
又津川沢王泉寺厚海上人是も入寂の相今に不朽現然ようう
赤水子是を説も其載言一矣に怪ようう仏を浮予人代言下
を味べ是ホのるに代りてく七奇ようと加てく人民間の俗七奇を
不知辛時他邦の客ようと向訊せくれく是渉ようとひ出るに代せ

即答に依りて、るものとおぼゆ

其十二　七ツ法師八ツ滝頸城郡高田の南雑波山にあり赤の時日西に旋次たどめく滝白く見えて、り中の時よもれば即滝の中央正く法師の形あ、れ出ツ其色さ、れに代来るを岩ぶ、ゐ、と、れど見る西岡新向の滝に不動尊の形あ、ると、ゐ、ぐ、く遠近の峯ち樹の茂るとお映じく其形をうをなるべ、予今町八幡に、く見る人ることるに、ゐ、ざれども景色をざ、ゐ、又糸魚川の辺に牛形と、く奇とも雪解の比正く山畔に見る即大石あり、く残雪の中に先ツ形、くるを人其十三　八房梅蒲原郡小岳村にあり即親鸞上人の旧跡

親鸞上人乃
旧跡八ッ房の
梅花図



なり　一坐蓮林　今の人呼くにあり〜こゝいづれの説にもせよ深に五百年来の古木にして老根は虎屈〜枝〜は竜蟠アラく一根八木に分れ天とさ〜地を掃ふ雅致いとべ〜〜ど其花淡紅八重の大輪枝〜坐を分つ〜開き其清香芳然として数里ふゝ〜手遍〜諸四の老梅を見るといへど其奇勢是より對するものなし〜其實法の気味あるなどいろ〜に敢て論にあらべと

其十四　風穴　風洞　二所彩雲上山四上寺孫陀堂の後絶登の下に往尺ばかりある岩穴あり〜風を出すと扇風の力に比べ俗説に角田渓の洞口にお通じく奇とうとゝ〜官

凡伊夜日子山を隔て三里あまりの山続へるに是
ざれども又外に風のかうべさと云ふ所ぶ邑即地中源く
大空所あり〳〵自然に氣式茂るあり又地中泉脈乃
通ずる所ふ〳〵山を穿て溪間に通じ〳〵又頸城郡渡
山に風洞あり〳〵平未見水徑と河水南逕北屈縣西十里者
風山山上有穴如輪風氣蕭瑟〳〵と即雲上山の風穴これと
おなじ

其十五　蓑虫の火　虫の名に何生の所なも限なし細雨蕭條
たる夜蓑笠にひとり路をゆく者あまたび忽然として蓑の毛
に螢火のごく光るあり付見えてこれを忽蓑毛つちあんに
火をうつす笠の下を見のぬれたる所をおく光燃出
り落るる露皆火をなすとなり心をたづね身を動ぜ
ずゆくこと又自然にきゆる蓑なりかぎ〳〵ぞ傘衣形
ホ和尚又紀中湖水の中にあり狐狸の怪あり〳〵とい
説あれども尤にあらざる鬼火なり老子庵筆記西
野菱苗稲穂雨夜忽火の起る成る是古戦場の燐火と
とかくせりおもふ

其十六　土用清水　古志郡長岡著岳明神の山下中沢村
一谷内村　田間小さき所石の穴より清水出る年毎六月土用に
入前より水おのづから出土用中に清水溢〳〵ゆ十八日を

歴〻次第に水減じ〻也一説に小松内大臣平重盛の舎弟
池の中納言頼盛搭津一谷落城の後此四に来り蒲冠寺三
条の城に入る此中沢村にあり水を出るに時六月の炎暑
のうり無なる水即以杖地をさして得之と此説伏波将軍源
頼義の伝に似〻〻信じがたけれども此泉の奇異なるべ〻
其十七　白螺　前に記る古志郡瀧門山上芋ケ平村馬追ケ
池にあり他邦の人多〻見を見んと式市もれども村老敢て
ゆるさず今人多〻池神のおしむ所に〻〻山大に荒
るゆへなり六月雪をくだし風雨洪水あり故よおそれて推矢古
なる式を〻〻今人他邦の人に池を見せるをだにゆるさず

いわん予弱冠のころ四月廿四日此所に多く落る雷雨
に吉ケ平に出嶺式市むなぎ日より風雨はげしく六日まで
留嶺せしが其中村老に伝て山中七池水おく見ぶる
せり白螺は田螺のちいさきものなり

予今の七奇を論ずるに古の七奇のうち
捨つべきものあり新に加へんと欲す　おのおの発
明たる人今他邦に問奇を出せしに人ごとに奇なる
あり即奇なり又後の人時の宜きにしたがへ
後の七奇を撰述すべし

○新撰七奇

石鏃　鑄鞴

此二奇古の海路白兎に易る　新撰海路八尤に少く

べくして白兎八近国金敷なるべきなり

火井　燃土　燃水　胴鳴　無縫塔

此五奇八古より賞称せるところをあらはすなり

右

北越奇談巻之二終